平成２３年度共同研究の概要（成果報告書抜粋）

研　究　種　目：一般研究

研 究 代 表 者：周 建中（東京成徳大学 人文学部・教授）

研 究 分 担 者：なし

研究題目（和文）：

中国「退耕還林・退牧還草」政策実施の効果と問題点について―　黄土高原地域を中心に

研究概要（和文）：

中国における「退耕還林・退牧還草」プロジェクト実施の効果について、黄土高原を対象に緑化の様子、黄沙抑制効果と砂嵐の発生頻度の変化、経済と住民生活の改善および問題点について実地調査を行い、データの収集、聞き込み、意見交換してきた。

陝西省榆林市では、2001～2010 年の間、砂嵐（視程 1km 以下）の発生回数は 2002 年以降、2007 年を除けば大半は減った。揚沙（視程 1km～10km）は 2002 年以降の波が大きい。浮塵（黄砂、視程 10km 以下）の発生頻度は 2002 年以降はかなり低い状態が維持されている。近年緑化の効果は顕著であり、昔と比べて風は強くても、空気中に含まれる砂埃の量が著しく減ってきたという。

内モンゴルオルドス市では 2006 年だけは高くなっていたが、その他の年での 2002 年以降の傾向は、2001 年に比べ、減少状態は続いた。

陝西省延安市安塞県では、森林被覆率は 1998 年の 18%から 2010 年の 34%, 土壌流失整備面積は 46%、土壌浸食量は 1998 年の 14000t/k ㎡から 2010 年の 6000t 以下、洪水や山崩れと揚沙の日数は明らかに減ってきたという。

1997 年から 2002 年まで延安地区、榆林地区の植生被覆率は 8.45%増えたという。

オルドス市森林被覆率は 80 年の 3 倍強、90 年の 2 倍にまで増えている。植生被覆率は 60～70%となり、砂嵐は昔と比べて大分減少してきたという。

緑化による水土保持の効果により、ここ 10 年来、黄河の水の土砂含有量や渤海への輸送量は 1/8 まで減り、年流量も 580 億 m3/年から 380 億 m3/年まで減少したと説明を受けた。

衛星データによる鳥取大学乾燥地研究センターHP の「技術的措置」コーナーに掲載中の「黄土高原 1999～2004 年植生量変化」（木村玲二準教授提供）を見ても、かなり緑化植生の情況がよいと見受けられる。

バヤンノル市の草原における退牧還草（禁牧）の実施結果は、牧民の収入が以前より多くなったため、喜ばれる。生態移民の実施結果も、過放牧が減り、牧草の生育状態が改善された。そして以前の人口が多かった時期と比べて輪牧もできるようになったという。

私の見た限りでも効果が大きいと思う。

傾斜度 25°以上でもまだ実施の計画がない農地がある。農民は政策が何時まで続けられるかとの心配もあるという。